

---

# ソフィリアの魔女

未来

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソフィリアの魔女

### 【Nコード】

N8871X

### 【作者名】

未来

### 【あらすじ】

ズル賢い先代の王により、罪なき魔女の住みか狹隘になっていった。そして、次世代のクルクセル王の政治が国民を追い詰め、魔女たちを苦しめていた。魔女は人間そのものを汚らわしき偶像と捉え、復讐の炎をその胸に宿す。今は亡き少女の手で王は地に堕ちる。後継者争いから始まる小さな内乱が拡大し、ソフィリア国は魔女の予想以上に早く衰退してしまった。

## 奪われた大切な森（前書き）

この小説のジャンルはファンタジーですが、童話のような文体で書いています。ご了承ください。

## 奪われた大切な森

ある国の隣に動物と植物が生きる大きな森がありました。

まだ誰も足を踏み入れた事のない、それはとても綺麗な森でした。その森には昔からたくさんの魔女が好んで住み着いていました。

曇りのない空の下では緑が輝き、鳥の美しい鳴き声が聞こえます。動物達は争いもせず、ただのんびりと仲良く暮らしていました。

今はもう、昔の話です。

数十年前、人間らが森の隣にあつた枯れた地に村を作りました。やがて村は国となり、人間が増えました。

住みかを手に入れる為に木々を切り、食料を確保する為に森の一部が焼かれ、動物達は追い払われてしまいました。

大好きな森を汚された魔女は人間に怒りを向け、復讐する事を決めました。

彼女らは知識を分け合い、どうすれば人間が絶望し、ここから消えるのか考えました。

長い年月を掛けて。

魔女達の考えた復讐はとても残酷で酷いものでした。

## 妖精ルリイ

隣に大きな国がある小さな小さな森で妖精ルリイは生み出されました。

美しい金の髪に、空を写したような青い瞳を持つ、少女のような妖精です。

ルリイは生みの親である一人の魔女に大切に育てられました。

「ああ、愛しの妖精、ルリイ。私の願いを叶えて頂戴。その為に私はあなたを生み出したのよ」

「はい。アリテルーシ様。お望みならば何でも叶えてさしあげます。ワタシはその為に生まれたのですから」

アリテルーシと呼ばれた妖艶な女性はこの森に住む、最後の魔女です。

他の魔女はルリイを作る為に魔力を使い果たし、消えてしまいました。

ルリイはアリテルーシが大好きでした。  
ですから、どんな事でもするつもりです。

小窓から見える満月を見つめながらアリテルーシが言います。

「今夜は月が綺麗ね。まるであの人を見ているようだね。ねえ、ルリイ。」

「はい。アリテルーシ様。」

機械のように応えたルリイの瞳が月を捕らえました。  
長い金髪が夜風に揺られキラキラと輝いています。  
アリテルーシはそれをつつとりとした表情で眺め、小さくため息をつきました。

「アリテルーシ様？」

不思議に思ったルリイは小首を傾げて大好きな生みの親の名を呼びました。  
月が雲に隠され、少し辺りが薄暗くなりました。

「ルリイ。こんな綺麗な月をアレに見せたくないわ」

「アレ、とは？」

「王サマ、よ。私のルリイを傷付けた醜い人間。だから、見せたく

ないの。消して頂戴？」

アリテルーシが静かに言いました。  
雲が去り、再び月が姿を現しました。

明るく照らされた部屋にはアリテルーシが一人、月を見上げていました。

## 見捨てられた王サマ

国中の明かりが消えた真夜中。

森の目の前に佇む城だけが明かりを灯し、賑やかでした。

王サマは毎日城に美しい者を集めて夜会を開いていました。

「ガッハツハツハー。酒が足りぬ。もっと持って来い！」

金で作られたグラスを片手に、毛皮のマントを着た王様が叫びます。毛皮は森の兎を何匹も殺して作らせたものでした。

隣には美しく着飾ったお后様が居座っています。

斜め後ろに控えていた家来は困ったように眉を下げ、言いました。

「殿下。それ以上はもう……国の予算が底ついてしまいます。どうか、ご理解を」

「大臣。お前は我に口答えするのか？政治を任せてやっているのだから税を増やすことぐらい出来るだろう。早く酒を」

「しかし、クルクセル王！あなたは様は国を潰す気なのですか？税を上げれば国民は飢え死にしています。私に政治を任せて下さっ

たのですから今少し話を聞いて頂きたい」

「黙れ！大臣。いや、リオルよ。キサマまで我を愚弄し、裏切るのか？国にとつて我は絶対。それは奴隷でさえ知っていることだ。伯爵家当主であるキサマが知らない筈がない。ならば従え。二度目は無いぞ……酒を持って来い」

伯爵家当主リオルは大臣として立派に政治をこなしていました。車椅子から降りることの出来ない身体でも国の為、国民の為に休みなく働いています。

己の事しか考えない王族と違って国民のことを一番に考えているのです。

「はい。王サマ。お酒はここにちに」

突然、煌びやかな衣装をまとった踊り子を掻き分けて酒を手にした少女が現れました。

腰まで伸びた艶やかな金髪はリオルの髪色と同じでした。

白い肌を隠すように仮面を被っています。

それから、純白の膝丈ドレスを小さな身体で着こなしていました。

「おお！娘。気が利くな。我が前に跪き酒を注げ。勿論、我が妻にもだ」

上機嫌にお后様の肩を抱き、少女に手招きするクルクセル王。  
少女が近付く事を止める者は誰もいませんでした。

「踊れ、踊れ。はっはっはっ。娘よ。コレは美味しい酒だな。なんと  
いう名だ？」

狂ったように踊り出す踊り子を横目にクルクセル王は並々と注がれたお酒を飲み干しました。  
リオルは何も言いません。

お酒の名を問われた娘は少し迷った後、正直に答えました。

「名は、ありません。」

「ほう。何故だ？それほど珍しい酒なのか？そうだろうな。私の舌  
にコレほど合うのだから」

「それは国の外れの下水で汲んだ水に普通のお酒を交ぜたものです。」

「

笑みを消したクルクセル王。

くすり、と馬鹿にしたように王妃が笑いました。

怒りと酔いで顔を赤くしたクルクセル王は無言で少女の仮面に金の  
グラスを投げつけました。

カタン。パリン。

大理石の上に落下した仮面と金のグラスが割れる音が響きます。素顔を露わにした娘を見たりオルは何を思ったのか、動き出した兵を止めてしまいました。

にやり、と不適な笑みを零したクルクセル王は己を侮辱した者の顔を見ようと黒く濁った瞳を向けました。

満月のように美しく、長い金髪に宝石のような青い瞳。

純白の膝丈ドレスが夜風に吹かれ、揺れています。

クルクセル王が動きを止めました。

少女——ルリイは隠し持っていた短剣をゆっくりと取り出します。

まるで幽霊を見たように青ざめ、静止したクルクセル王。

目の前のそれに向かってルリイは何の躊躇もなく短剣を振り上げました。

ザシュ。

静まり返った室内に響く音。

それは優雅なものではありませんでした。

大理石に広がる赤い液体、横たわる王妃は息をしません。

民の為に君臨する王が自らの妻を盾にし、命を繋いでいるのです。

「キサマは私の刺客か？その容姿、見覚えがあるぞ。ああ、案ずるな。コイツは側室だ。代えなどいくらでもいる」

美しいモノ好きなクルクセル王。

ルリイの素顔が美しいと理解した途端に冷静さを取り戻しました。

血塗れの短剣を片手に標的を見下すルリイは何も言いません。

殺した妃を一別し、首を傾げます。

何故、家族が死んだのに悲しまないのか不思議に思ったのです。

ルリイは側室の意味を知りませんでした。

「……ルリイ？」

それはとても小さな声でした。

クルクセル王の背後に控えていたリオルが呟いたのです。

死んだ筈の妹の名を。

瞬間、ルリイが静かに微笑みました。

主人であるアリテルーシに呼ばれたようで嬉しかったのです。

「リオルよ。お前の妹はとうの昔に死んでいる。我に逆らい、侮辱

した愚かな娘。しかしよく似てるな。キサマ、名は？」

「ルリイ。」

王の問いにルリイは即答しました。

そして、何の前触れもなく短剣の先を王に向けました。クルクセル王が盾となるモノを見つけ出すより早く刃がふくよかな身体に突き刺さります。

「……キ、キサマ！あの時の復讐か？いや、キサマ生きているはずがない！キサマは何者なんだっ！」

突然焦りだしたクルクセル王。

刺されたと気付いた時には遅く、逃げる暇もありませんでした。

ルリイには王が何を言っているのか分かりません。

自分を誰かと重ねている哀れな人間と解釈しました。

しかし、一度抱いた疑問は消えずにルリイの思考を支配します。

アリテルーシは王に月を見せたくないと言いました。

それだけではありません。

「そう。王サマ。アナタはワタシを傷つけたのね。アリテルーシ様が言ってたの。醜い人間って。だから、間違い無い」

ルリイにとって、アリテルーシの言ったことは絶対でした。  
それ以外はどんな事を言われようと信じたりはしません。

「何をしている！お前たち！この無礼な娘を早く殺せ！！」

辺りを見回し、衛兵が動きを止めていることに気付いたクルクセル王は怒鳴りました。

慌てて武器を構える若き衛兵。

それらを気にしようもしないルリィ。

命令通り今にも斬り掛かりそんな衛兵をリオルは止めてしまいました。

王の命令は絶対ですが、兵を動かす権利を所有しているのは大臣だけです。

「……何の真似だ？リオル！」

お腹を刺されたクルクセル王は痛む傷口を片手で抑え、逆らったりオルを睨みつけました。

弱々しく王座から立ち上がり、ルリィから少しでも離れようと、ゆっくりとバルコニーへ歩みます。

「何故だ。何故、誰も我を助けようとせんのだ。我はこの国の王。民は我を敬い、我の為に死ぬ。そうではないのか？」

バルコニーに立ったクルクセル王の瞳に写ったのは遠くで光る太陽と、自分を見上げる国民達でした。

「そうではない。そうではないの。誰もアナタを敬ってない。アナタは民に守られる価値などない。そんなの、ワタシはどうでもいいけれど。アリテルーシ様が待っているの。早く、帰らないと」

軽い足取りでバルコニーに顔を出したルリイは上りかけた太陽を見て少しだけ不機嫌になりました。

短剣はクルクセル王に刺さったままです。

故に、ルリイはもう凶器を何も持つてはいません。

王宮の騒がしさを聞きつけた国民で溢れる広場。

変わり果てたクルクセル王の姿見て唖然としていました。

「やめろ。やめろやめろやめろ！我は王だ！たかが愚民に殺されるはずがない！」

「もう、アナタは二度と月を見ることは出来ない。どうしてって？アリテルーシ様が望んだの。だから、ね？」

ルリイはとん、と軽くクルクセル王を押しました。

低い手すりでは自分の体重を支えられず、下から見物していた国民

に向かって落ちて逝きました。

どしゃり。

ぐしゃり。

肉の、骨の、人間の碎けた音が聞こえました。

醜い姿で息絶えたクルクセル王を囲うようにして国民が立っていました。

国民は王を見捨てたのです。

ルリィはそれを確認することなく室内へと戻って行きました。

## 一時の喜び

一人の子供が王の死体に近づきました。

もう、人間としての姿を保ってはいません。

何も知らない子供はこう言いました。

「これ、なあに？とてもいやなおいがするよ！ごみなの？」

周囲にいた大人達は困ったように顔を見合わせました。

子供が示す先には息絶えたソフィリア国王。

本来なら敬うべき存在です。

無垢な瞳を輝かす子供の母親らしき女性が宥めるように言いました。

「そうよ。それはごみなのよ。早く捨てなくては。母さん達がお掃除するからあなたは学校へ行く準備をしてらっしゃい」

我が子にこれは死体だと言いたくなかったのでしょうか。  
薄い笑みを浮かべながら子供の頭を優しく撫でました。  
それを見た父親らしき男性がにこやかに言います。

「そうだな。さっさと掃除してしまおう。みんなでやれば直ぐ終わるさ」

「うん！母さん、お掃除頑張ってね！」

子供は両親の言葉を信じ、家へと支度しに帰って行きます。

気弱そうな若い女性は幼い子にそれを見せないようにと背を向け、老人は何事も無かったように朝の散歩に。

一部の平民と貴族に使える者はそれを片付け始めました。

こうしてこのソフィリア国の王はゴミとして国民に掃除されたのでした。

綺麗になった広場の一カ所。

敷き詰められていたレンガは新しいものに取り替えられ、染み一つありません。

「やった！ゴミが片付いた！これでこの国は綺麗になったんだ！」

「もう、何も怯える必要がないのね！だってあのゴミが無くなったのよ！」

国民は喜びに浸り、これからの事について考えようとはしませんでした。



流れる時を見送って（前書き）

一発書き見直ししてません。

次話投稿後に書き直すかもです。

## 流れる時を見送って

月が姿を消した夜明け前。

ルリイが主人の元へと帰って来ました。

森の奥深く。

そこはまだ人間が足を踏み入れていない唯一の住処でした。

綺麗な木々に守られるように建っている古びた小さなお城。

かつて魔女達がアリテルーシへの贈り物として建てたものです。

ソフィリア国はクルクセルの即位後に領土を拡大し、大国となりました。

王族として生まれ、育てられたクルクセルは自己中心的で欲しいモノは権力を使って手に入れていたのです。

大きな森を開拓し、領土にしてしまえば他国と戦争することなく国を簡単に拡大出来ます。それが狙いだったのでしょう。

代わりに多くの自然と動物が犠牲となり、魔女の生き場を追い詰めました。

魔女達は失われた森は戻らないと諦め、生きる為に人間のような生活を始めました。

流行りのドレスに身を包み、街へ食料調達へ。

まじないを込めたアクセサリーを売って稼いでいました。

残り少ない森はソフィリアの領土として魔女の存在を知らないクルクセルに認められてしまいました。

今ではアリテルーシとルリイだけが住む森。

もう、一人の魔女と妖精しかいません。

弱々しいランプの明かりが一つの窓から漏れていました。

アリテルーシが待っていたのでしょうか。

数時間前にここを離れ、アリテルーシの為だけにクルクセルを暗殺したルリイは無表情でした。

喜びも、悲しみも感じられない青い瞳はただ明かりの灯る一室を見上げるだけ。

その一室はアリテルーシの部屋でした。

必要最低限しか無い生活用品に、森で咲いた花を生けた花瓶があります。

彼女を魔女だと示すものは何もありません。

なかなか入らないルリイを見かねてアリテルーシが窓を開けました。

「おかえりなさい。ルリイ。早く入りなさい。夜が明けてしまうわ」

「アリテルーシさま……」

アリテルーシは我が子をみるような優しい眼差しでルリイを見つめ、おいでと手招きしています。

長い黒髪を束ね、青紫のネグリジェ姿は美しく、どこかの貴族令嬢のようでした。

「ここまでいらつしやい。愛しい妖精。私の元でアレの最期を語りなさい。こんな話、お日様の下でするものではないわ。月も、太陽も消えた今がいいのよ」

何か言いたげなルリイは素直に扉を開けて中へと入りました。

薄暗い城内は埃っぽく、湿っています。

それを氣にとめることもせず、真っ直ぐと階段へ向かうルリイ。

真っ正面にある広い階段には汚れて色の区別がなくなつた絨毯がひかれていました。



流れる時を見送って（後書き）

今更ですが、ユニークの意味が分かりません…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8871x/>

---

ソフィリアの魔女

2011年11月17日13時17分発行